



特集

モーツァルト時代の
コンサートが秘めた意図

安田和信

7曲で構成された
オール・モーツァルト・プログラム

読響は今月の《サントリーホール名曲シリーズ》と《東京芸術劇場マチネシリーズ》でオール・モーツァルト・プログラムを組んでいる。シンフォニー・オーケストラの公演でモーツァルトが特集されること自体は決して珍しいことではないが、今回のプログラムは選曲や曲目の数・配列の点で興味深い。まず、全体が7曲で構成されている点。現代の一般的なプログラムは序曲や短めの交響詩で始まった後、ソリストが登場して協奏曲が上げられ、休憩を挟んで大規模なシンフォニーというような構成を採る。つまり現代の相場は3曲と言えるから、曲数が7というのは多い。

現代のプログラムではメインを飾ることの多いシンフォニーの一つが冒頭に置かれているのも風変わりだ。しかも、モーツァルトのシンフォニーで最も長大な作品の一つである〈プラハ〉がいきなり

最初に登場するのである。現代の感覚ならば、オードブルや食前酒を楽しもうと思ったら、いきなりがっつりとした肉のメインディッシュが出てきた、というような感じであろうか。今回のプログラムのシェフ、ジェラルド・コルステンはメニューの順序を間違ってしまったのだろうか。

18世紀後半の
コンサートの再現 !?

もちろん、そんなことはない。コルstenはモーツァルトの時代、18世紀後半のコンサートにおけるプログラムのコンセプトを活用しているのである。では、モーツァルト自身が実際に1780年代のウィーンで開催したコンサートのプログラムがどんなものか見てみよう。実は、モーツァルトが開催したコンサートの記録は、ザルツブルクにいた父親レオポルトが亡くなる1787年までは、専ら彼が父に宛てた書簡が情報源である。しかもその情報は日にち、開催場所等に限

られ、すべての曲目が列挙された書簡は一例しかない。1783年3月22日、ブルク劇場で開催されたコンサートがそれである。以下にモーツァルトの書簡(3月29日付レオポルト宛)で掲げられたプログラムを引用してみよう。カッコ内は推定された曲目である。

- ①新ハフナー・シンフォニー [交響曲第35番ニ長調K. 385]
- ②ぼくのミュンヘンのオペラ [〈クレタの王イドメネオ〉 K. 366] から、四つの楽器伴奏による、ランゲ夫人の歌うアリア「もし私が父上を失い」
- ③ぼくの予約演奏会の協奏曲から、第3番 [ピアノ協奏曲第13番ハ長調K. 415] をぼくの演奏で
- ④アーダムベルガーの歌う、バウムガルテンのための劇唱 [コンサート・アリア K. 369]
- ⑤ぼくの最近のフィナーレ・ムジーク [セレナードニ長調K. 320 〈ポストホルン〉] から、小コンチェルタン・シンフォニー
- ⑥当地で好まれている『ニ長調協奏曲』[ピアノ協奏曲第5番ニ長調K. 175] をぼくが演奏。これに『変奏曲ロンドー』[ピアノと

管弦楽のためのロンドニ長調K. 382] をつけました

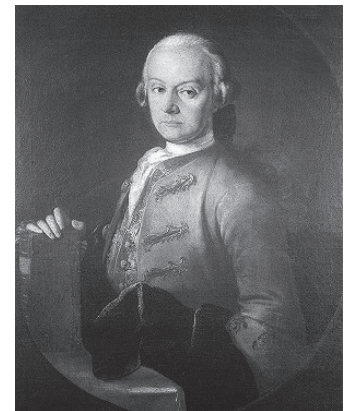
- ⑦ぼくの最後のミラノのオペラ [〈ルーチョ・シッラ〉 K. 135] から、タイバ嬢の歌う「私は行きます、急いで」
- ⑧ぼくの独奏で小さなフーガ (皇帝がいたので) と、[パイジエッロの]『哲学者たち』というオペラのアリアによる変奏曲 [K. 398?] —— これはもう一度アンコールしなくてはなりませんでした。それに [グルックのオペラ]『メッカの巡礼たち』から「愚民が思うは」の主題による変奏曲 [K. 455?]
- ⑨ランゲ夫人の歌で、ぼくの作曲による新しいロンドー [コンサート・アリア K. 416]
- ⑩最初のハフナー・シンフォニーの終楽章

モーツァルトの書簡から見る
プログラムのコンセプト

このプログラムは曲目の多さと多彩



ピアノを弾くモーツァルト



父レオポルト・モーツァルト

さ、あるいは演奏時間の長さにおいて現代のコンサートとは大きく異なっている。現代ではメイン曲目に位置づけられる交響曲が最初に置かれ、最後の10曲目で“お開き”あるいはアンコールのように最初の交響曲のフィナーレが演奏されるのがまず目に付く。交響曲によって枠付けされたプログラムの中心を占めるのが、ピアニストたるモーツァルト自身を主役に据えた協奏曲や独奏曲であり、さらには8曲目のような即興演奏のコーナーである。臨席していた皇帝のヨーゼフ2世の音楽趣味に合わせたフーガだけでなく、当時のウィーンで名高いオペラ作曲家二人の旋律による変奏曲を即興することで、臨機応変にその場の聴き手を楽しませようとするモーツァルトのサービス精神がそこに現れていると言うべきであろう。

プログラムの目玉だった ゲスト歌手のアリア

このコンサートの会場は宮廷劇場であったブルク劇場である。ふだんはオペラの上演をしている劇場だが、四旬節の時期はオペラが上演されず、その代替の催しとしてコンサートが



モーツァルト初恋の女性
アロイジーア・ランゲ

行われたのだった。格式の高い会場を借りることのできたコンサートゆえに、モーツァルトは新作と旧作を取り混ぜた、いわば“自撰”の名曲集のようにプログラムを組んだと言えるだろう。その際、主役たる自分自身のピアノ演奏と同じように重視したのが、ゲストの歌手を招いてのアリアであった。2、4、7、9曲目を歌った歌手たちは、いずれも当時のウィーンを代表する歌手であった。

4曲目を歌ったアーダムベルガーとは、テノール歌手のヨハン・ヴァレンティン・アーダムベルガー（1740～1804）であり、1780年からウィーン宮廷劇場で活躍していた。モーツァルトがウィーン宮廷劇場のために書いた最初のオペラ〈後宮からの誘拐〉K.384（1782年初演）でベルモンテを歌ったのはアーダムベルガーである。公私ともに親しい間柄だったのは間違いなく、彼とモーツァルトはフリーメーソンでは同じ支部に所属していた。

7曲目のタイバー嬢とは、ウィーンの音楽家一族の出身であるテレゼ・タイバー（1760～1830）のことで、彼女も〈後宮からの誘拐〉の初演に出演しブロンデを歌った。1788年の〈ドン・ジョヴァンニ〉K.527のウィーン上演の際にはツェルリーナを歌っている。

2、9曲目のランゲ夫人は、1778年からウィーンで活躍したソプラノのアロイジーア・ランゲ（c.1761～1839）を指す。彼女の旧姓はウェーバーで、何を隠そう、モーツァルト夫人のコンスタンツェ

の姉であるとともに、モーツァルトがかつてマンハイムで出会った初恋の女性でもあった。〈後宮〉ではヒロインのコンスタンツェ——モーツァルトと結婚した妹の名と同じ——を歌ったほか、〈ドン・ジョヴァンニ〉のウィーン初演ではドンナ・アンナを歌っている。

イタリア・オペラの経験値を アピールしたモーツァルト

主役モーツァルトのピアノ演奏と並んで、ウィーンの第一線で活躍する歌手たちを起用したアリアの数々が呼び物となっているのは、言うまでもなく、オペラ上演が禁じられた時期に開催されたコンサートがオペラの代用であったことを如実に示しているであろう。だが、モーツァルトにとってはより一層重要な意味があったと思われる。彼がウィーンの宮廷劇場で最初に上演したオペラ〈後宮からの誘拐〉はドイツ語であったが、上記コンサートが開催された1783年を境に、宮廷劇場はイタリア・オペラの上演をメインに据えるようになっていた。モーツァルトはイタリア・オペラの経験も既に豊富であったことをウィーンの有識者たちに宣伝する必要があったのである。

イタリア人作曲家 サリエリに対抗

当時のウィーン宮廷劇場は、ドイツ語圏の南部の宮廷劇場がほとんどどこもそうであったように、イタリア人のオペラ作曲家が重用されていた。1780年代の



アントニオ・サリエリ

ウィーン宮廷劇場では、アントニオ・サリエリ（1750～1825）が最も多くのレパートリーを作曲しており、オペラ作曲家としての成功を目指していたモーツァルトの一番のライバルであった。上記コンサートのアリアはすべてイタリア語を歌詞とし、テノール歌手、軽いソプラノ（タイバー）、重いソプラノ（ランゲ）を起用してその声質に合致したレパートリーを選び、さらには最新の〈イドメネオ〉と少年時代にミラノで上演した大作〈ルーチョ・シッラ〉からのアリアを取り上げることによって、イタリア・オペラでのキャリアを暗に誇っているようにも映るだろう。

以上のように、モーツァルトのコンサートは当時の習慣に従ったということもあるが、自らの音楽活動を切り開くためのショーケースのようなものでもあった。必然的に多彩な曲目を擁し、長い催しとなったのである。

（やすだ かずのぶ・音楽学／音楽評論家）

読響 2015-16 シーズンの 聴きどころ

〈よみうり大手町ホール編〉



世界屈指のビジネスセンター、東京・大手町で2014年1月にオープンした読売新聞ビル。その4、5階にあるのが「よみうり大手町ホール」です。501席の会場は半円形の木材を重ねた壁面が特徴で、音を多方向に反射して豊かな響きをもたらす設計です。

そんな真新しい会場で、読響のメンバーらが交響曲や室内楽を奏でるのが《読響アンサンブル・シリーズ》。都心に勤めるサラリーマンやOLにも足を運べるように、平日公演は午後7時半開演と、遅めにスタートします。午後9時終演(予定)のコンパクトな構成としました。

「大人のための音楽教室」とも位置付けて、開演前の午後7時から解説の時間を設定。聴きどころの説明や、演奏者との楽しいトークをお届けします。

豪華な共演者をそろえ、充実した内容。耳の肥えたファンの期待にも、十分お応えできるラインナップです。

6月16日(火) 川瀬賢太郎のモーツァルト

新年度はオール・モーツァルト・プログラムで幕開けします。指揮台に立つの

は元気いっぱいの新鋭、**川瀬賢太郎**。軽快な歌劇〈フィガロの結婚〉序曲でスタートし、ヴァイオリン協奏曲第3番ではモスクワ生まれの名手、**アレクサンダー・シトコヴェツキー**が切れ味よいソロを聴かせます。名匠メニューインの愛弟子としても知られる若手です。メインは壮麗な交響曲第41番〈ジュピター〉。モーツァルト最後のシンフォニーにふさわしいスケールと陰影を川瀬がどう描き出すか、ご注目ください。



川瀬賢太郎



アレクサンダー・シトコヴェツキー

7月26日(日) 上岡敏之×読響の室内楽

ドイツのヴッパータール歌劇場総裁を務める**上岡敏之**は、指揮者として既におなじみですが、ピアノの腕前も達者。ここで演奏する2曲で



上岡敏之

も、ドイツ本流に根差した骨太な音楽作りを聴かせてくれるでしょう。モーツァルトのピアノ四重奏曲第1番はト短調の悲愴美にあふれる佳品。ブラームスのピアノ五重奏曲は重厚なロマンティシズムに彩られた傑作です。ふだんの指揮活動で練られた芸風がピアノ演奏にどう反映されるのか、関心の高まる公演です。

9月16日(水) 下野竜也のハイドン



下野竜也

読響首席客演指揮者の**下野竜也**は、ウィーン国立演劇音楽大学に留学した際、みっちり和本場でハイドンを学んで来ました。「交響曲の父」



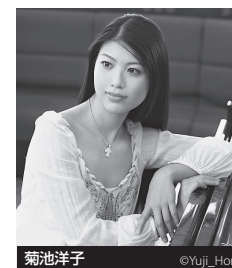
遠藤真理

と称されるハイドンの作品を集めて、その味わい深い楽しみを存分に引き出します。優美な旋律がちりばめられた**チェロ協奏曲第1番**でソロを務めるのは、着々とキャリアを積んでいる**遠藤真理**。メインの**交響曲第101番〈時計〉**はハイドン円熟期に書かれ、〈驚愕〉〈軍隊〉〈ロンドン〉などと並ぶ代表作です。第2楽章の時を刻むような優しいリズムが耳に残ります。

11月5日(木) 菊池洋子×読響の室内楽

ザルツブルクのモーツァルト国際コンクールで2002年、日本人として初めて

優勝した**菊池洋子**は、モーツァルトを始めとする古典派の演奏で高い評価を受けています。この回では、**木管楽器とピアノによる五重奏曲**



菊池洋子

©Yuji_Hori

で双璧のモーツァルトとベートーヴェンの作品に取り組みます。曲にふさわしい清潔な様式感を備えた菊池の魅力が、全開となるでしょう。定評がある読響の木管セクションからも、腕利きが集結します。優雅な呼吸に満ちた愉悦感あふれるアンサンブルを、お楽しみください。

2016年1月27日(水) 小山実稚恵×読響の室内楽

シーズン最終回に登場するのは近年、円熟が著しい**小山実稚恵**。デビューから30年を経て、演奏にますます深みを加えています。この回では、シューマンにシューベルトの**ピアノ五重奏曲**と、このジャンルで最高の傑作を、一気に聴かせます。シューマンでは豊かなファンタジーを鮮やかに飛翔させ、〈ます〉の愛称で知られるシューベルト作品では格調に満ちた親密な世界を作り上げます。〈ます〉ではコントラバスが編成に加わるので、ふだんの室内楽よりも重心の低い響きが聴きどころです。



小山実稚恵

©Kazuo Matsuura

常任指揮者カンブルランのタクトで華やかに開幕
バルトークでは、各楽器が次々とソロを奏で大活躍！

2015年4月4日(土) 14:00 東京芸術劇場

◆第176回東京芸術劇場マチネーシリーズ

2015年4月5日(日) 14:00 横浜みなとみらいホール

◆第79回みなとみらいホリデー名曲シリーズ

指揮：シルヴァン・カンブルラン

グルック：歌劇《オルフェオとエウリディーチェ》から“序曲”“精霊の踊り”“復讐の女神たちの踊り”
ハイドン：交響曲 第94番《驚愕》 バルトーク：管弦楽のための協奏曲



©読響(撮影:青柳聡)
シルヴァン・カンブルラン

カンブルランが、読響と初めてブルックナーを演奏
壮大な世界観を持つ第7番で、音楽の神髄に迫る

2015年4月10日(金) 19:00 サントリーホール

◆第547回定期演奏会

2015年4月12日(日) 14:00 東京オペラシティ コンサートホール

◆第1回東京オペラシティ名曲シリーズ

指揮：シルヴァン・カンブルラン バリトン：小森 輝彦

リーム：厳粛な歌 — 歌曲付き (日本初演) ブルックナー：交響曲 第7番



©読響(撮影:青柳聡)
シルヴァン・カンブルラン

小林研一郎が指揮する《炎のチャイコフスキー》
実力派チェリストの宮田大が、華麗なソロを披露！

2015年4月15日(水) 19:00 サントリーホール

◆第581回サントリーホール名曲シリーズ

2015年4月16日(木) 19:00 東京芸術劇場

◆第15回読響メトロポリタン・シリーズ

指揮：小林 研一郎 チェロ：宮田 大

チャイコフスキー：歌劇《エフゲニー・オネーギン》から“ポロネーズ”
ロココ風の主題による変奏曲 交響曲 第5番



小林 研一郎

遅めの20時開演、仕事帰りに楽しむオーケストラ！
コバケンが渾身のタクトでブラームスの傑作を演奏

2015年4月17日(金) 20:00 文京シビックホール

◆第9回読響カレッジ (19:30から解説)

指揮：小林 研一郎 ナビゲーター：中井美穂

ブラームス：交響曲 第1番



©読響(撮影:堀田芳久)
小林 研一郎

ヨミキョー

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00、年中無休) ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

お申し込み・
お問い合わせ

4月公演の聴きどころ

渡辺 和彦

(わたなべ かずひこ・音楽評論家)

4月の読響は、《東京芸術劇場マチネーシリーズ》(4日)と《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》(5日)、《定期演奏会》(10日、サントリーホール)と《東京オペラシティ名曲シリーズ》(12日)の計4公演は常任指揮者シルヴァン・カンブルラン指揮、《サントリーホール名曲シリーズ》(15日)と《読響メトロポリタン・シリーズ》(16日)、《読響カレッジ》(17日)は小林研一郎指揮で行われる。

このうち、《定期》《オペラシティ名曲》でブルックナーの7番の前に演奏されるヴォルフガング・リーム(1952年生まれ。現代ドイツを代表する作曲家)の《厳粛な歌》は、日本のオーケストラでこれまで何度か演奏されている1996年の作品で、ブラームス《4つの厳粛な歌》と関連した曲。ただし読響が今回採り上げるものは、一覧表にもあるように「歌曲付き」バージョンの日本初演である点に注目。日本人として初めて「ドイツ宮廷歌手」の称号を得て2012年秋に帰国し、今や大活躍中のバリトン、小森輝彦がどんな新バージョンのリーム《厳粛な歌》を聴かせるだろうか。

カンブルランによる他の2公演は、グルック、ハイドン、バルトーク。そのコンセプトは、あくまで想像ながら「びっくり」かもしれない。ハイドンは“そのまんま”として、グルックとバルトークにも、それまでの曲想と全く違う異質のフレーズが飛び込んでくる瞬間があり、特にバルトークの通称“オケコン”は、その出典や意味について、これまで複雑な議論がされてきた。

小林研一郎指揮による15、16日の2公演では、マエストロのレパートリーの中でも、これまで最も評価と人気の高いチャイコフスキーの5番に期待。第2楽章冒頭でホルンの長く素晴らしいソロがある曲としても知られている。さて、当日のホルン・ソロは？

《ロココ風の主題による変奏曲》のソリストは、日本チェロ界のホープ、宮田大。1986年生まれで、09年に若手チェリストにとって最大の難関で勲章でもある「ロストロポーヴィチ・コンクール」で優勝している。現在、日本には若く優秀な男性弦楽器奏者がたくさんいる。宮田はその中でも最先端を走っている。